

一 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。(字数制限のある問いは、句読点・記号も一字に数える。なお、原典から一部表記を改めた箇所がある。)

「人間が自然の中に集落をつくって住む。道をつくって車も通るけれど、車があまり通らないへりのほうには適当に草が生え、それを食べる虫も適当に住みついて、ということになってゆく。そうすればホタルも姿を見せるだろう。田んぼも冬はほうっておけば、そこにまた何かが住む。人間がそこで耕作をして、山の木も生えてきたぶんだけを切っていれば、また若枝が伸びてくる」

①これは、以前ほかどこかで語ったことばの一部である。

人間が住み、なんらかの活動をしてゆく中で、人間の住み場と自然との接点に生まれる新しい場——それが人里である。

「自然を守れ」という人々からすれば、人里は明らかに本来の自然ではない。しかし不思議なことに、②人間はそこに自然を感じる。それは「人間なんてちっぽけなものだ」と思わせるような人を圧倒する自然ではなく、なんとなく人の心をなごませるような自然なのである。

人里がなぜ心なごませるのかはよくわからないが、人里はとにかく明るく開けた感じがする。深い原生林の暗く湿った状態とはまるでちがう。そして人里は多様である。はてもない大草原とは異なって、さまざまな木が生え、それぞれに花を咲かせ、実をつけている。そしてすこし奥へ行けば、深く繁った林になり、森になる。この明るさと開放感、そして目を飽きさせない多様さが人里の特徴なのだろう。

そしてなによりも人里は「自然」なのである。たまたまそれは人の手によってつくられたものであるとはいえ、まったくの自然の中でも同じような場は出現しうる。たとえば深い森林の中で、一本の大きな老木が倒れたとしよう。そこには日があたるようになり、それまで暗い木かげの下草として生えていたのはまったくちがう、日射しの好きな草がたちまちにして茂りはじめる。陰樹のかげになった地中で一〇〇年近くも眠っていた、いわゆる陽樹の種子が、降りそそぐ日光にうながされて芽を出す。

こうして生まれた明るく開けた場所は、それまでとはまったく異なる様相を示す自然となり、この③新しい姿の自然と、それを囲む「今までの」自然とが移行してゆくところには、日射しの強さへの好みの異なるさまざまな植物が生え、それぞれを食物とする昆虫がどこからともなく集まってくる。

このようなところをエコトーンと言う。エコトーンは多様性をはらんだ環境であって、さまざまな植物が育っている。林や森につらなる部分には高く茂った木。その林床には日かげをとくに好む草がまばらに生えているだけである。そのような草はけっして派手な花は咲かせない。日もほとんどあたらないから、日なたのすきなチョウは飛んでいない。

しかし、④エコトーンは移行の相である。このようなかなり暗い林に続いて、もっと明るい林がある。

この林は若い林である。そして日あたりを好む林である。木々はまばらで、とにかく若い。開けた梢を通して、日光が降りそそぐ。だからそこには、日射しを好むいろいろな草が生える。そして思い思いにさまざまな花を咲かせる。

明るく日があたるので、そこには日なたを好むチョウが飛んでくる。チョウは目で花を見つけて蜜を吸う。そのために、そこに咲く花はよく目立つ美しいかわいらしい花である。それは、そこにチョウがいるからであり、そしてチョウがいるからこそそのような花を咲かせる草が生えるのである。チョウはそういう目立つ花がなければ蜜を得ることができないし、そういう花はチョウがいなければ花粉を媒介してもらえないからだ。

花に依存して生きているのはもちろんチョウだけではない。ハチもハエも、甲虫そのほか多くの虫は、花の

蜜や花粉に頼って生きている。したがって、エコトーンにはそのような昆虫たちが集まってくる。昆虫たちが集まってくれば、当然ながらその昆虫たちを食べる動物も集まってくる。小鳥、クモ、カエル、トカゲ、そして昆虫を食べる昆虫。

こうしてエコトーンはさまざまな生きものたちをひきつける。

エコトーンは、環境の状態が移行する場所である。それはしたがって、決して広大な面積にわたることはない。エコトーンが幅何百キロにわたって広がるということはあり得ないのである。

⑤人里はまさにこのようなエコトーンなのだ。人里の特徴、そして人里のもつ心なごむ景観は、人里がエコトーンであるがゆえに生まれるのである。

人が手を加えない自然の中で、エコトーンはつねにそれまでそこにあった姿の自然の再生、更新の場として存在している。いろいろな理由から深い針葉樹林であった場所に生じたエコトーンは、ほうっておかれればしだいにその姿を変えていって、いずれは深い針葉樹林を再生するだろう。老木は枯れて倒れるであろうが、いずれはあとから育ってきた木によって更新されるだろう。そして、そのエコトーンに生きていた植物や動物は、また別の場所に生じた新しいエコトーンへと移り住んでいくことであろう。自然ではいつもこのようなことが起こっている。

重要なのは、そこで起こっていることはすべて自然の「論理」にしたがったものだということである。

老木が倒れたり、雷で山火事が生じたりするかわりに、人間が住みついて林を切り開いても、同じような事態が生じる。そこには新しいエコトーンが生まれ、それまでの自然の再生のプロセスが始まる。

純自然の場合と異なるのは、人間がこの自然の再生を嫌い、つねにそれと闘ってきたことである。その結果、自然の再生は完成することなく続けられる。そして、人間のそれに対する闘いも続けられてきた。

この闘いが続いている間、エコトーンはもとの自然の再生による最終的な消滅に至ることなく維持される。

この状態が人里なのである。人間はもとの形での自然は破壊したかもしれないが、新しい様相の自然を生じさせ、しかもそれをほぼそのままに維持するというはたらきをするようになった。⑥人里はこのように特異な自然なのである。

人里においては、人間が人間の意図にもとづいて、そして人間の論理にしたがって、自然に変化を加える。しかし、自然は自然なりに、自然の論理にもとづいて押し戻してくる。この押し合いが続く間は、エコトーンとしての人里は維持される。

人里は心なごむ自然であり、人はそこに自然を見、そこから自然の論理を学ぶことができる。自然の論理を知ること——それは今日の人間にとつてきわめて大切な意味をもっている。ほか「人里をつくらう」と訴えているのもそのためである。

では、人里をつくるにはどうしたらよいのか。それは人間の論理の無理押しをしないことである。自然が自然の論理で押し返してくるのを許すことである。

人間はしばしば自然の巻き返しを嫌い、自然の論理を徹底的につぶしてしまおうとする。道は完璧に舗装し、側溝は水を流す目的だけのためにコンクリートで固める。林の木を侵入を食い止めるため芝生にして、それを維持する。そしていかにも自然らしく見えるように植木を植え、その植木はこざれいに剪定する。

このようにして生じるものは人里ではなく、たんに擬似人里、人里もどきにすぎない。人里もどきには自然の論理ははたらいっていない。わずかながらはたらくとしても、人間は人間の論理にしたがって、自然が生やした草を刈り、虫を退治する。一見、自然のように見えても、そこに自然はない。徹底的に人間の論理で貫かれているからである。⑦今、あちこちでつくられている「自然の森」や「水と緑の公園」は、そのほとんどすべて

がこのような人里もどきであると言つてよい。

なぜそれがいけないのか？ それは人間が「自然のバランス」を崩しているからだ、と考える人がいる。残念ながらそうではない。人間が「自然と共生する」姿勢を忘れているからだと言う人もいる。これも残念ながらあつていい。

「自然のバランス」「自然と人間の共生」というようなことはよく言われる。いかにも人を納得させるひびきをもったことばである。けれど、近年の動物行動学あるいは行動生態学の研究を見ると、^⑧ どうもそのようなものはわれわれの幻想にすぎなかったのではないかと気がしてくる。

昔の生態学は、自然のバランス、生態系（エコシステム）の調和、ということ強調した。そして、人間がこのバランスを崩さないようにすれば、自然と共生していけると考えた。しかしこの一〇年、二〇年ほどの間に明らかになってきたとおり、自然界の中では、動物も植物もそれぞれの個体がそれぞれ自身の子孫をできるだけたくさん後代に残そうとして、きわめて利己的にふるまっているように見える。かつて信じられていた「種族保存のためのシステム」というものもなく、個体がそれぞれ他人を蹴落^けとしてもいいから自分だけは子孫を残そうと、きわめて利己的にふるまっている結果として、種族が維持され、進化も起こるのである。

「自然界のバランス」なるものも、そこになにか予定調和的なバランスがあつて、自然はそれを目指して動いている、というものではけつしてない。ある個体が自分の利己を追求しすぎると、そのしつぺ返しを受けて引き下がるを得ない。こういう形で結果的にバランスが保たれているに過ぎないのだ。

自然界に見られる「共生」についても同じような見方ができる。花と昆虫のみごとな共生に、われわれは心を打たれる。けれどこれも、花と昆虫が「お互いうまく生きていきましょう」と言つてやっていることではないらしい。花は昆虫に花粉を運んでもらえばよいのであつて、つくるのにコストのかかる蜜など提供したくない。昆虫は昆虫で、自分たちの食物である蜜を花からできるだけたくさん奪えばいいのであつて、花粉など運んでやるつもりは^⑨ 毛頭ない。

この両者の「利己」がぶつかりあつたとき、花はますます精巧な構造を発達させることになった。できるだけ少ない蜜を提供しつづ、なんとしても昆虫の体に花粉がついて、昆虫がいやでも花粉を運んでしまうような花の構造ができあがつていったのである。

人間も動物であるから、利己的にふるまうのは当然である。しかし、動物たちは利己的であるがゆえに、損することを極端に嫌う。浅はかに利己的にふるまうすぎでしつぺ返しを食つたときに、やつとそれをやめるのではなく、もつと「先」を読んでいるらしい。どのようにしてそれを予知するのかわからないが、これはどうも損になりそうだと思うたら、もうそれ以上進まないものである。その点では、動物たちのほうが徹底して利己的である。きわめて賢く利己的だと言つてもよからう。

^⑩ 人間はじつに浅はかに利己的であつた。しかしこれからは自然が自然の論理でふるまうのを許せるぐらいに「賢く利己的に」ふるまうべきではなからうか？

（日高敏隆『日高敏隆選集Ⅷ 人間はどういう動物か』より）

問1 傍線部①「これは、以前は、どこかで語つたことばの一部である」について、このことばの中で筆者は人里をつくることを呼びかけている。このように呼びかけているのは何のためか。文章全体を読んだうえで、本文中の言葉を用いて十字程度で答えよ。

問2 傍線部②「人間はそこに自然を感じる」について、「人間」が「自然を感じる」人里とはどのような場所か。その例として最も適当なものを次のア～オの中から選び、記号で答えよ。

ア 人が草を刈り虫を退治することで希少な草花を守っている場所。

イ 村の人々が飼育したホタルを川に返し人々の目を楽しませているような場所。

ウ 人が木材に使用する杉を植樹したことで高く美しい木立が広がっているような場所。

エ プランターの朝顔が色とりどりの花を咲かせ行き交う人々の心をなごませる場所。

オ 人間が林を切り開いたことによつてナズナなどの雑草が生い茂るような場所。

問3 傍線部③「新しい姿の自然」について、次の選択肢ア～オの中で「新しい姿の自然」に当てはまるものをすべて選び、記号で答えよ。

ア 「暗い木かげの下草」

イ 「陽樹」

ウ 「高く茂った木」

エ 「甲虫」

オ 「深い針葉樹林」

問4 傍線部④「エコトーンは移行の相である」とあるが、これはどういうことか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から選び、記号で答えよ。

ア 見渡す限り開けた野原が広がり色とりどりの草木が花をつけており、その蜜を吸う虫たちが生きる場所であるということ。

イ 新しい自然が古い自然にとつてかわり、花や虫もそれに応じて絶え間なく進化していく場所であるということ。

ウ 人間が育てた花が咲き植樹した木が若い林を形成しており、日射しを好むチョウが飛んでくる場所であるということ。

エ 二つの異なる自然がとなりあい、それぞれの自然にあつたさまざまな生きものが生息している場所であるということ。

オ 陰樹と陽樹とが隣接して林を形成する場所であり、陰樹に住んでいた昆虫がより明るい陽樹の林へと移動する場所であるということ。

問5 傍線部⑤「人里はまさにこのようなエコトーンなのだ」について、人里のどのような点がエコトーンであると言えるのか。それを説明した次の文の空欄（A）～（D）に入る語句をそれぞれ本文中から抜き出せ。ただし、（A）は二字、（B）～（D）はそれぞれ三字ずつである。

人里は、人間の住み場と自然との（A）^{二字}（B）^{二字}（C）^{二字}（D）^{二字}に生まれ、（B）^{三字}（C）^{三字}（D）^{三字}（E）^{三字}という特徴を持っており、環境の状態が移行する場所である点。

問6 傍線部⑥「人里はこのように特異な自然なのである」について、「人里」はどのように「特異」であるというのか。本文中の言葉を用いて六十文字以内で説明せよ。

ア 人里では自然が日々の暮らしの中の一風景としてあるに過ぎないが、人里もどきでは自然を利用して人を呼び寄せようと工夫が凝らされているから。

ウ　人里では人間が自然に手を加えるとともに自然が押し戻してくることを許容するが、人里もどきでは自然の在り方を顧みず自然らしく見えるようにしているだけだから。

オ　人里ではそこで人が生活できるよう自然に人の手を加えるが、人里もどきは人が住む場所ではないため人間の論理は不徹底で人里と呼べるものではないから。

ア 自然はバランスや共生を目標しているのではなく、自分の利己を追及した結果としてバランスが保たれ共生しているように見えるのに過ぎないということ。

ウ　自然界のバランスや自然と共生するということは耳に心地よいけれども、人間が暮らしていくためには徹底して自然を支配する必要があるということ。

オ 自然はバランスや共生を目指すことなくただ利己的にふるまうのであり、人間こそが自然との共生ができる唯一の生き物なのではないか。

ア 考えられない
イ そもそもない
ウ 少しもない
エ 頭がない
オ あまりない

た」と言っているのか。その説明を述べた次の文の空欄（Ⅰ）・（Ⅱ）に入る語句をそれぞれ本文中から抜き出せ。ただし、（Ⅰ）（Ⅱ）ともに五字である。

問11 本文における筆者の主張として最も適当なものを次のア～オの中から選び、記号で答えよ。

イ 人間はかつて自らの利欲のために自然破壊を繰り返したけれども、これからは自然に手を加えることをやめ自然が自然のままに存在するのを認めることが望ましい。

人間はその多くが自然を徹底的につぶしてきた都市で生活をしているけれども、人間と自然の関係を
見直した上で自然と共にある人々は生活することが望ましい。

オ人間は自らの生活のために自然に変化を加えるけれども、利己の追求が行き過ぎて人間が不利益を受ける前に自然の巻き返しを受け入れる態度をもつのが望ましい。

どこまでも続くように見える直線。

この区間は、コース一番の難所という人も多い。実はこれから先の山登りのS字カーブよりも厳しい傾斜が、気力だけでなく脚力も徐々にむしばんでいく。

でも、それはみんな一緒だ。練習量もロードバイクの性能にも差がなければ、あとは気力、勝とうという精神力。

負けられない。オヤジも母さんも、自分のことは二の次で、息子が※ ツール・ド・フランスに出ることにすべてをかけている。おれだって、いろんなものを犠牲ぎせいにしてきたんだ。

そのとき、後ろから疾風を感じた。

「あ？」

思わず（A）を疑った。風と共にかげ上がり、あつというまに目の前に出てきたのは、学ラン姿の高校生だった。

「なんだ、あいつ……。ママチャリ？」

さらに前を走っている紫のジャージのおじさんならんだ。ロードバイクの細いタイヤの倍はありそうな、ママチャリの太いタイヤで、グンツとスピードが上がった。

おじさんが抜かれた黒い影を見て驚いた顔をした。

なんであんなに速いんだ。ふざけた格好しやがって。①ママチャリなんかに負けてたまるか。

もう一度ダンシングで追いかける。風を切つてスパートし、紫ジャージと学ランを続けて抜かした。

うちのオヤジが[※]チューンしたロードバイクが、ママチャリなんかに負けるはずがない。さっきはライバルを抜かした直後で油断してただけだ。

そう思った途端、再び風を感じた。あつというまに抜き返される。

「くそ！」

なんでこんなヤツに……。

おとなの選手たちを次々に抜かす高校生。引き離されないように、必死にくらいつく。

軸が左右にぶれる特徴のある走りだった。ただ後ろをついていくときには、そんなに速いと感じないのに、だれかを抜かすモードになると、とびきり速く感じる。どういうチューンをしているのか、一見ふつうのママチャリに見えるが、なにか速く走るしかけがあるにちがいない。

こいつの秘密を突きとめたくて、引き離されないように夢中で走った。

スタートから十四キロ地点を過ぎ、コースは左手に大きくカーブする。そこにある青と白の看板『カーブ1』。

今までの長い長い上りは、山のすそ野にすぎない。ここから本格的なつづら折りの山登りになる。

カーブごとに看板があり、数字が大きくなる。右に左に大きく曲がるそのたびに、少しずつゴールに近づいていくことが実感できる。だから、終盤体力的には厳しいけれど、どこまでも続くように見える直線よりは、ずっと気持ち楽だ。

いくつかのカーブを登っていて気がついた。目の前のママチャリ、ライン取りがめっちゃうまい。ときどき禁止されている対向車線にも浸食しながら、すすいと選手を抜いていく。もしかしたら、このコースを熟知しているのかもしれない。

そう思ったら、勝手に身体が反応した。

高校生が走るライン上をびったりとくっついて走る。自転車の性能では勝っているのだ。同じラインで走れば、離されないかもしれない。いや、離されてたまるか。

『カーブ9』の左カーブで、高校生がちらりと後ろを振り返った。白い通学用のヘルメットをかぶった日焼けした面長の顔。②目が合い、ニコリと笑った。後ろにおれがいるのがうれしいという顔をして……。

どういう意味だろう。わけがわからない。

ちぎれなくて悔しいという気持ちにならないのだろうか。それとも、まだ本気を出していないとも言いたいのだろうか。

ムカついて[※]ケイデンスをこれでもかと上げた。もう一度抜き返してやる。もう二度とバカにして笑わせないように。

ならばかけると、高校生と再び目が合った。確信した。ヤツは本当に楽しげに笑っていた。

その直後、グンッとママチャリが加速した。

「くそっ！」

自転車ひとつ分空いた間。

それ以上離されないように懸命にペダルを回した。③ジリジリと差を詰めていく。

タイヤひとつ分の間を取ったまま、次のカーブに進入した。三人のおとなたちの集団を避けるために、強引にインを攻める。最短のライン取りでママチャリのあとに続いた。

速いペースだ。レースではありえない格好で走るママチャリの背中を、夢中で追いかけているだけで、確実

にふだんより速く走っている実感があつた。

※※※ 中 略 ※※※

コースは残り三キロ。本格的なS字カーブが続く。

すぐ前を走る黒い背中から、ハアハアという荒い息づかいが聞こえる。ここからは意地だけだ。勝ちたいと強く思うほうの勝ちだ。

ときどき引き離されそうになりながらもなんとか後ろをついていった。高校生の抜群のライン取りを真似しながら、それでもチャンスをつかっていた。

ゴール前の直線までもつれこめばスパートで勝てる。

今は我慢どころだ。

大きな右曲りのコーナーで、ゆっくり走る集団に追いついた。

高校生がちらりとカーブミラーをのぞいた。インにいく気だ。

ときどき救急車両やスタッフ車、それから、既にゴールした選手が下ってくる場合があるから、反対車線は走行禁止だ。

このママチャリも一応ルールに従ってはいるが、前に遅い集団がいる場合には、カーブミラーを確認してから反対車線に飛びこんでいくこともある。そういうときの加速は圧倒的に速い。

遅れてたまるか。

予想通り反対車線に飛び出した高校生のあとに続いた。

かなり強引にインに突っこむ。白線に近いアスファルトの段差をママチャリは軽々と通っていく。

同じラインを攻めこんだそのとき、段差にタイヤを取られ、身体が横に流れた。反射的に足首をひねった。

※クリートペダルがシューズから外れる。

ロードバイクが山際の草の上に転がった。目の前にあざやかなタンポポの黄色が飛びこんできた。

「……！」

次に見えたのは、澄みわたった青空。なにが起こったのか、しばらく理解できなかった。

落車した……。

そう気がついて、跳ね起きた。顔を上げると、高校生の姿はなかった。

当然だ。

「だいじょうぶか？」

後方の選手が声をかけながら通り過ぎていく。

「くそっ！ いいペースで走っていたのに……」

あわててロードバイクを起こしてまたがった。片足でペダルを踏もうとするが、いつもと足の感覚がちがう。血の気がサーッと引いた。

「チェーンが……」

転んだはずみでチェーンが外れていた。

「こんなときに……」

ロードバイクを降りて、チェーンを直そうとする。あわてればあわてるほど、指先が思うように動いてくれない。

次々に後ろからくる選手に抜かれていく。

Xに苛まれ、額の汗をぬぐうのもどかしい。

「……！」
そのとき、^⑥目がひとりの選手に釘づけになった。白のピナレロ……。顔を歪ませて懸命にペダルをこぐ
そいつと目が合った。

ハルヒルで負けたライバルだった。

「……」

抜かれた。また、負ける。

おれは呆然と立ち尽くした。

前を走っていたのに。今回こそはライバルに負けまいと思っていたのに。中学生でトップは無理でも、同学
年の選手には勝ちたかった。

オヤジと母さんに合わせる顔がなかった。ゴール地点にいる両親は、今か今かと期待をかけた息子のくるのを
待っているだろう。

ライバルのほうに先に姿を見せたら、どんなに落胆するか。

しかたない……。チェーンが外れたのがいけないんだ。マシーンさえちゃんと動けば、今からだってライバ
ルをぶち抜くことができるのに。

おれだって、あいつみたいに身体に合ったピナレロに乗ってさえいれば……。

うつむいた頬に汗が伝わって落ちた。

このままりタイヤしよう。結果を残せないなら、無理してチェーンを直して走る必要はない。

「どうした？ 故障か……？」

ロードバイクとはちがう乾いたタイヤの音がした。

「……！」

顔を上げて、とっさに言葉が出なかった。

さっきまで夢中で追いかけていたママチャリ高校生だった。

「チェーンか？」

高校生がママチャリを路側に止め、ロードバイクをのぞきこむ。

「なににきたんだよ！」

おれは思わず叫んだ。第一こんな変なヤツと関わったから、痛い目にあったんじゃないか。

「気づいたら追いかけてこなかったから、なにかあったのかと思ってさ。転んだのか？ だいじょうぶか？」

「……」

言われて初めて痛みに気がついた。ヒジのところから血がにじんでいる。

「何考えているんだよ。レース中だろ？」

「だって、おもしろかったからさ」

高校生はそう言っ、日に焼けた顔でにっこりと笑った。

「……？」

「おまえ、中学生だろう？ スゲーよ。おれが抜かしたのに、ちぎれなかったヤツなんて……」

「……なに言ってるんだよ。だって、それ、ママチャリだろう？ おれのはロードバイクなのに……」

「この道路は通学路なんだぜ。中学のときから毎日走っているんだよ。おまえらみたいなよそからきたヤツラ
には負けないよ。しかも、^{*}中坊にさ」

「……」

「とにかく、おれ、おまえに追いかけてスゲーわくわくしたんだ。さっさとこれ、直して続きやろうぜ」
高校生はそう言っ、しゃがみこんでチェーンにむかう。

「……」

中学生が通学のときにかぶるような白いヘルメットを見下ろしながら、^③喉の奥にしよっぱいものがこみ上
げてくる。

次から次に、後続の選手が追い抜いていく。

「できた！ はまったぞー」

高校生が立ち上がって、額の汗をぬぐう。

「あれ……？」

ロードバイクを起こして少し前進させた高校生の（B）がくもった。

「あちゃー。パンクもか……」

「もういいです」

再びロードバイクを横にして、パンクした後輪をのぞきこむ高校生におれは言った。

たかがママチャリと馬鹿にしていた。

けれど、ママチャリの太いタイヤなら楽に越えられたアスファルトの段差が、細いロードバイクのタイヤで
は越えられなかった。

今回のヒルクライムのレース用に軽さを重視したタイヤに変えた。新品のときは丸いタイヤが、調整を重ね
ていくうちに親指くらいの幅で平らにすり減っていた。今回のレースには、ぎりぎり耐えられると判断してい
たのに。ふつうに走ってさえいれば。

こうなったのは、愛車を理解していなかった自分のうぬぼれが原因だ。

イタリア製の何十万のロードバイクじゃなくても、勝つ方法はあった。負けたのはおれ自身のせいだった。

機材の性能のせいにして自分が情けなかった。

④先にいってください。そんなに速いのに、もったいないです」

「なんだよ。おれはおまえと続きが走りたいんだよ」

「だって、せっかくのレースが……」

「レースなんて関係ないの！ おまえと一緒に、全力で抜か抜かれるかっていうのが楽しいんだから……」

「楽しい？」

おれは思わず聞き返した。

「おまえだって、楽しかっただろう？」

高校生が振りむいた。

自転車に乗っていて、楽しいなんて感情を持ったことがなかった。レースはいつだって真剣勝負で、勝った
めのものだ。勝たなければ意味がないし、練習だってそのためにしていた。

⑤風が吹いて足元のタンポポの綿毛が飛んだ。

それでも、高校生の後ろ姿を必死で追っていたとき、楽しいと思わなくなかった。どうして速く走れるの
か、知りたくてたまらなかった。

「うん。おれも、^⑥アニキともっと一緒に走りたい」

「アニキ？」

高校生がすっとんきょうな声を出した。

「へへへ。よし、直すぞ！ 換えのチューブ持ってるんだろう？」
「うん」

高校生は照れくさそうに笑って、ロードバイクへむかう。
もっと速く走れるようにしたい。オヤジのためではなく、自分自身のために。そして、この人の後ろを全力で追いかけて。

強い日差しに光る通学用の白いヘルメットを見下ろしながら、心からそう思った。

(加部鈴子『風のヒルクライム ぼくらの自転車ロードレース』より)

※ツール・ド・フランスは毎年七月にフランスおよび周辺国を舞台に行われる自転車プロロードレースのこと。

※ダンシングはサドルから腰を浮かせてペダルをこぐ「立ちこぎ」のこと。

※チューンというまく動くように調整すること。

※ケイデンスは自転車のペダルを回す速さ。

※クリートペダルは「クリート」という部品を使い、シューズとペダルを一体化させた自転車のペダル。

※中坊は中学生のこと。

問1 波線部①「ジリジリと差を詰めていく。」②「目がひとりの選手に釘づけになった。」に用いられている

表現技法を次のア～カの中からそれぞれ選び、記号で答えよ。

ア 直喩法 イ 隠喩法 ウ 擬音語 エ 擬態語 オ 擬人法 カ 体言止め

問2 二重傍線部「合わせる顔がなかった」の本文中における意味として最も適当なものを次のア～オの中から選び、記号で答えよ。

ア 申し訳がなくて、その人の前に出られなかった
イ 上手な言い訳が思い浮かばなかった
ウ どういう顔をして会おうかと必死に考えた
エ 今回の結果に納得してもらえないかどうかわからなかった
オ 何と言って謝ればいいのか分からなかった

問3 空欄（A）（B）にあてはまる語句を漢字一字でそれぞれ答えよ。

問4 傍線部①「ママチャリなんかに負けてたまるか。」について、主人公がこのように思う理由を説明した

次の一文の空欄に入る語句として適当なものを本文中から六字で抜き出せ。

自分のロードバイクに比べ、ママチャリは（ ）でも劣っている上に、何よりも自分のロードバイクはオヤジがチューンしたものだから。

問5 傍線部②「目が合い、ニコリと笑った。」について、この時の高校生の心情として最も適当なものを次のア～オの中から選び、記号で答えよ。

ア 抜き返しても必死にくらいついてくる主人公とは対照的に、まだ自分にはゆとりがあることを見せつけたかと思っている。

イ ロードバイクに乗った主人公を抜き返すことができ、自分の実力を見せつけることができたことに、うれしさを感じている。

ウ 主人公が学ラン姿でママチャリに乗っている自分を馬鹿にしていることに気づき、腹立たしく思っている。

エ 引き離されないように懸命にペダルをこぐ中学生が自分のすぐ後ろにいて一緒に走れることに、喜びを感じている。

オ 主人公が引き離されないように夢中で自分を追いかける姿を見て、自分が中学生だった頃のことを思い出して、微笑ましく感じている。

問6 空欄 X に入る語句として最も適当なものを次のア～オの中から選び、記号で答えよ。

ア 劣等感 イ 優越感 ウ 使命感 エ 焦燥感 オ 圧迫感

問7 傍線部③「喉の奥にしょっぱいものがこみ上げてくる」について、この時の主人公の心情として最も適当なものを次のア～オの中から選び、記号で答えよ。

ア さっきまで夢中で追いかけていた高校生が、自分のロードバイクのチェーンを直してくれていることに、ありがたさを感じながらも素直に喜ぶことができない。

イ レースで勝つことしか考えていない自分とは対照的に、勝つことよりも他人を助けることを第一に考えて自分の自転車を修理してくれている高校生の姿に感動している。

ウ レースは勝つためのものだと考えている自分にとって、高校生からはめてもらってもなぐさめにはならず、このまま負けてしまうことを悔しく思っている。

エ 本来ならチェーンくらい自分で直すことができるのに、転んで動くことができないために高校生に修理してもらえないことに対して、自分のことを馬鹿にしているようにしか思えず、なんとかして見返してやりたいと思っている。

オ 自分の走りを評価してくれた高校生に対して、自分のことを馬鹿にしているようにしか思えず、なんとかして見返してやりたいと思っている。

問8 傍線部④「先にいつてください。そんなに速いのにもったいないです」について、主人公がこのように丁寧な言葉づかいをするようになったのはどうしてか。その理由を説明したものとして最も適当なものを次のア～オの中から選び、記号で答えよ。

ア レースに勝てない原因が自転車そのものではなく、自分の判断の甘さにあったと冷静に分析する謙虚さが出てきたから。

イ 自転車がパンクした原因が自分にあることは分かっているものの、高校生が馬鹿にするためにチェーンを直しに戻ってきたと思いその好意をはねつけようと思ったから。

ウ 自分のうぬぼれでタイヤをパンクさせて困っていたところ、高校生がパンク修理に仕方なく戻って来てくれたことに申し訳なく思っているから。

エ タイヤのパンクは自分自身が原因だと分かっているが、両親のために完走しようと思っていてあきらめきれずにいたところに高校生が戻って来てくれて感謝しているから。

オ 今回のレースの敗因が自分にあると分かっただけに、そんな自分のために高校生が不本意にもレースを棄権することを残念に思っているから。

問9 傍線部⑤「風が吹いて足元のタンポポの綿毛が飛んだ。」という情景描写は、この前後で主人公の心情が大きく変化することを暗示している。その主人公の心情の変化を六十字以内で答えよ。

問10 傍線部⑥「アニキ」という語からうかがえる主人公の心情を説明したものとして最も適当なものを次のア～オの中から選び、記号で答えよ。

ア 高校生と会話する中で、レースについて、自分とは違って甘く考えていることが感じられ、高校生を見下すようになった。

イ 高校生と話をする中で、年下思いの優しい性格の持ち主であることが分かり、親しみを感じるようになった。

ウ 高校生と話をしているうちに、自転車に対する考えに共感し、高校生を慕う気持ちを抱くようになった。

エ 高校生と話をしたことで、レースについて自分と同一ような考え方を持っていることが分かり、ライバル視するようになった。

オ 高校生と話してみると、年上というだけあって、自転車に対する考え方が自分よりもしっかりしていることに気づき、尊敬するようになった。

問11 この文章の表現に関する説明として最も適当なものを次のア～オの中から選び、記号で答えよ。

ア 自転車用語を随所に用いることによって、主人公の自転車にかける熱い思いを表現している。

イ 「……」という表現を主人公の会話でのみ用いることで、主人公の複雑な心情の変化を表現している。

ウ 第三者からの視点で表現することにより、登場人物一人一人の心情が分かりやすくなっている。

エ 短文を続けて用いることによって、緊迫した雰囲気や文章全体に漂わせている。

オ 「白線」「黄色」「青空」など、色彩感覚豊かに表現することにより、臨場感を出している。

三 次の各問いに答えよ。

問1 次の傍線部のカタカナを漢字に改めなさい。必要ならば、送りなをひらがなで書きなさい。

1 彼の一生は変化にト^ンデ^イた。

2 原油をユニ^ユウする。

3 私は外科医をコ^コロザシ^シている。

4 城下町でスコ^ヤカに成長する。

5 農業を利用せず農地をコ^ヤス。

6 王のヒ^キイル^ル軍が遂にこの地へ着いた。

7 先生の机の上の書類がチ^ラカル。

8 理工学部教授はモッ^パラ^ラ研究にいそしむ。

9 キセツの料理を味わう。

10 国民の心をア^ヤツル。

問2 次の文をそれぞれの文のように意味を変えずに書き換えたとき、空欄に入る語句を指定された文字数で答えよ。

① 彼女は素直さに欠ける人間だという意見に対して、彼女は素直な人間だという意見の人はクラスでもほんのわずかだった。

↓彼女は素直さに欠ける人間だという意見を持つ人が、クラスの（二字）を占めた。

② この病気は肩以外のところにも痛みは出るのです。

↓必ずしも（三字）に痛みが出るとは限らない。

問3 次の八字の漢字を用いて二つの四字熟語を完成させよ。

倒 晩 成 本 大 転 器 末

問4 次の例文の傍線部の語句と同じ用法をア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

その話は作り話さ、と友だちはみんな言うかもしれない。

ア 聞いたこともない。 イ あるわけではない。 ウ 現実にはない。

エ 少しも知らない。 オ 創意工夫がない。

